

ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究

歴史編 (イギリス偏向の英語教育 – 第二次世界大戦前夜まで)

末延 岑生

はじめに

「ニホン英語 (*Open Japanese*)」とは、「日本語体系および日本人の生活体系が内在する、日本の文化とともに歩む英語である(末延 1991)」。

筆者は2011年から『ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究』をシリーズで発表してきた。それらは本稿の参考文献に掲げたように1. 「デザイン編」、2. 「形態編」、3. 「統語編(語順)」、4. 「統語編(時制)」、5. 「音声編」である。本稿は日本の英語教育の歴史をニホン英語の観点から述べたもので、以上5本の論文の原点を成すものであり、それは一口で言うと、独立国であるべき日本の言語学者、英語教育者たちの多くが、日本らしい言語環境の中で、何憚ることなく日本人の間でごく自然に生まれてきた「ニホン英語」の発達を強力な枷鎖で抑圧してきた、「英米偏向の英文法と英文学の教育史」といいいい。

しかしながらその歴史の中には、ほんの片鱗ではあるが遅しい「ニホン英語」の芽生えが見え隠れする。その意味では「ニホン英語」の歴史をたどるための論文でもあり、同時にそれが言語教育の観点からどのようにして抑制され、その結果、現代のような英米の英語発音と文法が唯一正しいものととらえるという間違った正義感を生み、そしてそこから生じる極端な英米英語の模倣癖が、どのようにして育ってきたかを検証するのが本稿の目的である。

第1章 英学のあけぼの

第1節 概観

国家的規模の過信

日本の英学の歴史をたどる前にまず、古来、日本が諸外国に対してどのような考え方を持っていたかを述べることから始めたいと思う。6世紀のころの日本の支配者は、すでに外国、なかでも東アジアに対しておごり高ぶった思想を持っていたのではないかといわれる。たとえば大和朝廷の聖徳太子が中華帝国に送った親書には「日出づる国の天子、日

の入る国の皇帝に申す」とある。素朴に受け取れば何の変哲もない、大自然の営みを自分の視点から述べただけの文だが、歴史学者たちの解釈では、当時の日本は6世紀ごろからアジアのみならず広く海外に対して、軽蔑意識を持っていたと考えられている。

しかし大和朝廷は中華帝国のような大国に対しては一目置いて、その劣等感を優位に導いて仏教文化とともに漢字で代表されるような、大陸文化の模倣を通じて追いつくという方法をとっていた。ところがその反動として、近隣のアジア諸国に対しては常に優越感とともに優位を保とうとし、従属を求めようとしてきたようだ。そう考えれば世界の国々が平等であるべきという民主主義的な考えは、まだ芽生えていなかったと考えるのも当然と思われる。

こうして中国との文化交流の成功をもとに、日本は遣唐使を派遣する。その一人空海は留学生として中国で漢字を学んで、帰国後音韻学研究である悉曇(しったん)学を広め、日本で初めての梵和辞典『梵字悉曇字母ならびに釈義』を著した。その間、定かではないが、空海ほか弟子とともに、当時まだ文字を持たない民衆のために、難解な漢字のごく一部を使って簡単で便利なカタカナやひらかな文字を考案し、それを民衆に伝えたといわれる。その後894年に、菅原道真是遣唐使の派遣を、これ以上危険を冒してまで中国から学ぶことはない、という理由で廃止する。それ以後11世紀の後半、かな文字の「50音図」が僧侶明覚によって発明されることになる。

過信から戦争へ

さらに蒙古襲来を予言し「神風」によって追い返したとされる日蓮の風評が、今後も常時日本の後ろ押しして、日本が危機に瀕したときにはいつも、必ず神風が吹いて日本の味方をして必ず打ち負けさせてくれる筈だという身勝手な歪んだ優越感へのの上がり、そしてついには過信となっていった。それが直接とはいわないまでも、後のアジアでの数々の戦争でその神風が功を奏したものと確信、後には日本が神の国と信じる日本の軍部が世界大戦に突入するきっかけのひとつともなり、大戦を長引かせる原因ともなった。こうしたアジア軽視の風潮は、欧米使節団の岩倉具視(1825-1883)ほかの世界見聞の中にも見られるが、それらは順を追って述べることにする。

さて日本に英語が入ってきて約150年、人々が英語を使うようになってざっと100年になる。英語はすでに英米の所有物ではなく、各国の文化にそって料理され、いまや世界の国際舞台で堂々と使われている。この間、日本人たちが受け入れてきた英語は、どのような変遷を経てきたであろうか。われわれの先駆者たちは、一部の英米人たちを含む洋行帰りの多くからは“変則”“いびつ”と言われながらも、大衆のレベルでは海外貿易に従事する人々を先頭に、従来からの慣れ親しんできた日本人独自の「ニホン英語」を胸を張って

守ってきた。それに比べて現在の日本の英語教育のあり方はどうであろうか。以上のような観点から、本稿では鎖国から第二次世界大戦前夜までの、日本の英学、英語教育の目的がどのように推移していったかについて論じる。

第2節 開国以前の英学

英語を学ぶ目的

1600年にイギリス人のウィリアム・アダマス(三浦按針)が大分県の海岸に漂着する。アダマスは時の将軍徳川家康に重用され、学問知識や造船術を与えている。そして1639年の江戸幕府の鎖国政策から、1853年のペリー来航までの約215年という長期間にわたって、日本は世界に対して鎖国を宣言する。その間、日本では独自の文化が栄える反面、封建制度が定着する。しかしそのときでさえ、実は幕府にはオランダや中国を通じて諸外国の情報が入っており、長崎にはオランダ語の通詞だけでも総勢数千人近くいたといわれる。その間、杉田玄白や前野良沢が蘭学を始め『解体新書』(1774年)を刊行したが、当然ながら差し迫った民衆の病気を治すためにオランダ医学を学んだのであって、オランダ語やその文化を学ぶことが本来の目的ではなかった(川澄p913)。

アダマスが来日してほぼ200年後の1808年、鎖国中の日本で、長崎に停泊中のオランダ船を拿捕しようと、偽ってオランダ国旗を掲げた英国軍艦フェートン号が突然長崎港へ侵入するという思いがけない事件があり、その防御不備の責任を取って長崎奉行が切腹した。幕府はこのような大事に至った原因の1つが、日本人が英語を理解することができなかったことにあると考え、早速オランダ語通詞たちに命じて英語を学ばせている。日本人が公式に英語を学んだのがこの時がはじめてと言われ、英語を教育することの目的がこのようにはっきりしていた。このころの長崎の通訳官の英語は“コムヘーレ”(Come here.)、ディキティヨナリー(dictionary)のような、いわばオランダ弁の英語であったが、これが明治中期まで続いたのだから相応の通用度はあったにちがいない。

その後1840年に渋川六蔵が蘭書からの翻訳『英文鑑』を出版するが、ここにも「本書の目的」の項には「国家の非常時に備え、また、英書の翻訳の際の参考にする」と英学の目的がはっきりと書かれている。翌年1841年にはイギリスの捕鯨船との交渉のために、さらに英語を学ぶ必要が生じた。その間、近隣の世界では1842年に英国がアヘン戦争の勝利で香港を占領していた。

第3節 開国

そして1853年、鎖国という2世紀余りもの沈黙の中、太平洋の彼方の「自由の聖地」といわれてきたアメリカから突如ペリーが来航、日本はついに開国することになる。時をほ

ほ同じくして漂流民の中浜万次郎、浜田彦蔵が渡米している。中でも彦蔵には『漂流記』があるが、それらはアメリカの歴史、政治、宗教、教育などを体系的に克明に紹介した、当時では貴重な学術資料でもあった。日本はこうして国際世界に接して以来、現在までまだ1世紀半くらいしか経っていない。長い世界の歴史から日本を見れば、ちょうど卵からかえったところの雛鳥のようなものだ。

開国直後のオランダは、もはやヨーロッパの中心勢力でなくなっており、オランダ語はもう古い道具で、世間ではもはや英語が洋学の主流になろうとしていた。このようにして蘭学にかわって英学は、フェートン号事や渋川六蔵の『英文鑑』の際の目的のように、あくまでも経済・法律・歴史・哲学・教育・道徳など、幅広い西洋の学問を吸収するための手段として英語を学ぶ事が目的であった。

そんな中1855年、豊前中津藩の下級武士の子福澤諭吉は、蘭学を学ぶために緒方洪庵の適塾に入門し、当時としては国家的に重要な学問であった兵書の日語翻訳を始める。1858年、幕府が500名前後の留学生や外交使節が西洋へ送ったその翌年、福澤は横浜に行き、いよいよ英語の必要性を目の当たりにする。すでに5カ国条約、中でも日英通商条約によって外交文書には英文を用いることが規定されていたこともあり、福澤は新しい時代の洋学は英学でなければならぬと直感、その準備を始める。

幕府はさらに1860年に使節を米国に派遣。その途上、福澤諭吉は中浜万次郎から英語を少し教わるのだが、万次郎の英語は、アメリカ人の英語をただ聞いたとおりに真似て発声する、後に正則英語(後述)と呼ばれるネイティブ英語に近かったと思われる。その後英学を教えることになった福澤は、英学塾を開設する。

こうしてアメリカに渡った福澤諭吉が著した『西洋事情』(1866)は、単なる西洋の真似事や翻訳ではなく、日本流に咀嚼した“自由の国アメリカ”を紹介、明治の国民に大きな影響を与えた。また1867年、諭吉はアメリカからの帰途大量の英書を購入、これが日本の英語教育の教科書の元となる。その翌年諭吉は慶応義塾を設立する。この頃、後に同志社を創設する新島襄が(1864年)函館を脱出し、米国へ向かっていた。

1868年(明治初年)チェコスロバキアの教育思想家J.A.コメニウスの著書『外国語教授法』の教育理論が、アメリカを通じて日本に入ってきた。初版は1647年で、教育学の分野の著作であり、21世紀の現在でも、大著『大教授学』とともに教育学の上に光を放つ名著である。現代から見ても実に論理的でかつ科学的教授法であるにもかかわらず、当時の言語学者の間ではあまりにも画期的過ぎたのか、ほとんど理解できなかつたようだ。これについては後述する。

岩倉使節団

その後明治政府も倒幕直後から手のひらを返すように「文明開化」を推し進めていった。まず1871年(明治4年)、岩倉具視を正史とする使節団を欧米へ派遣した。政府はこうしてこれからの国造りの参考にと、アメリカをはじめ、ヨーロッパ、アジアなど世界に使節団を送り込むが、真っ先に訪れた自由・平等の国アメリカでは、彼らが模範とする筈だったこの大国の裏側に潜む、帝国主義的覇権社会の矛盾を見破った。

次に訪れたヨーロッパからは多くの示唆を得るが、中でも、今後の日本は政治・法律などの面では、ドイツを理想とすべきという結論に至る。ところが帰路、かれらがアフリカ、西アジア、東南アジアで見たものは、ヨーロッパとは正反対に、自分たちより数段も貧しい国の人々の、赤裸々な姿であった。その表面の姿だけを見て同じアジアの仲間として理解しそれを憐れむどころか、人間としてではなく「土人」と呼ぶなど、蔑視したことが記されている。このように明治政府のエリート官僚たちの西欧羨望志向と、その逆のアジア蔑視思想があだとなって、ついには自らが欧米の植民地政策を真似、その挙句は自らも祖国にアジアの帝国主義的覇権社会を建設することを夢見て、帰国する。

第2章 広がる英語熱

第1節 英語を日本の母語に？

文部省はいよいよ留学制度を奨励し、ついには一時国家予算の1割を超えるほどの金額になる。各地に英語学校が開設されるとともに、英米から多くの英語教師が招かれる。そのうえ福澤の『西洋事情』の後、『学問のすすめ』(1872年)が出版され、民間の洋行熱がいよいよ高まるとともに1873年(明治6年)、驚くべき大胆な英語論が出現することになる。アメリカ行使で後に文相となる森有礼は、日本語を廃止して英語を日本の母語として採用しようと、次のような英語採用論を唱えた。

- (1) 日本は貿易立国を目指しているのだから、今や東洋貿易ばかりか世界を支配している英語国民の商業力、および彼らの使用する英語に対して無視できない状況にある。
- (2) 日本語では知的な思考と表現の面で不完全であり貧しい言語であるから、彼らの仲間入りをするのは不可能だ。一方、文明国の英語は論理的で精密で、高尚な思想を表現することができるから、これを日本の国語にすればよい。
- (3) とはいえ、英語はそのままでは複雑かつ難解な言語だから、日本人が習得しやすいような英語にしなくてはならない。例えばすべての不規則動詞や名詞の複数形を規則化し、気まぐれな綴り字は排して、音声に基づいた綴字法を独自に確立することである。

さて、(1)については、当時の世界を正確に読み取るこの視点は、先見の明としてうなずけるものがあるが、(2)は日本語が不完全だという科学的な根拠を示しているわけではない(参考:高梨 pp196-8, pp91-99)。(3)は「ニホン英語」に近い概念ではあるが、簡易英語に“改革”するというのではなく、“簡易のものも認める”といったほうがよかつただろう。

そこで森はエール大学の言語学者W.ホイトニーに意見を求めたところ、

1. これまで人為的に自国の言葉を捨て、他国民の言葉を母語として成功した例は少ない
 2. たとえこれを実行するとしても、日本国民は学問を開始するまでに、まず莫大な時間をかけて英語を学ぶことになり、結局彼らは英語どころか何も学べなくなる
 3. 仮に英語を日本の国語として採用したとしても、英語の本質的構造を簡略化すべきではない。英語国民の政治や科学、芸術などの文明の成果を文字通りに深く吸収できないからである、
- という返事が来た。

ホイトニーの考え方には概して、現代の言語教育学の視点からも示唆的な面がある。(1)の論点は今後万が一、残酷にも日本が植民地として強制されない限り、二千年近くも日本の文化の中で醸成されてきた日本語が、そう易々と英語に取って代われるものではなく、(2)もホイトニーは外国語を学ぶ苦勞を十分に熟知しているが、問題は(3)だ。

森は英語を日本の文明の進歩のために直接寄与することを目的とする道具として見ており、決して一部の人々の学問とか言語・文化研究の側面から見るのではない。森にとっては、英語は英語国民の文明の成果を紐解く鍵ではあっても、それは単に日本人にとっては貿易立国のための道具に過ぎなかった。そしてことばは道具だから、日本人が使いやすいように改良するために大胆にも英語の簡略化を目指した。今で言う、日本人にとって使いやすい、かつ世界に通じる「ニホン英語」の確立である。しかしホイトニーは、「英語はそのままで受け入れるべきであって、もし改良すれば、英語国民の社会に仲間入りできない」という。アメリカ人の立場として当然ではある。森はこのことばで主張を諦めたようだが、言語学者ホイトニーの論は、日本人が求める単なる道具としての言語というより、あくまでも“言語学のための言語学”を研究する学者としての、応えるべき唯一の解答であったと判断される。この忠告は、今後日本の英語教育で使うにふさわしい英語は、完璧なアメリカ英語の模倣を促す正則英語であるべきことを示唆している。

現在日本以外の非英語圏の英語使用国では、英語の発音や文法を、けっして微に入り細に入り真似るのではなく、むしろ母語の特徴を加えたり、省略形を丁寧化したり、逆に英語の不要な面を削除したりしながら、西洋文明の成果を吸収してきた。だが英語のネイティブ・スピーカーとして、英語という自国の所有物を他国の人々に勝手に乱されたり改良されることから、執拗に完璧に守ろうとする言語学者としてのホイトニーの潔癖な思想

は、残念なことに、これほどに言語社会学が発達を遂げた現今でさえ、英米はおろか日本人のほとんどの言語学者たちの間でも、頑として揺るぐことはない。こうして森有礼の突如の日本語廃止論は、ホイットニーによって止めを刺されたようだが、この英語採用論に影響されたためか、以来日本中に英語・外国語学校が林立することとなる。

第2節 英語より母語を

時を同じくして1873年(明治6年)、D. モルレーが文部省顧問として招かれ、日本の大学の教育を参観した。その結果、どの学科目も英語や独仏語で行われている状況を賞賛するどころか、彼はそれを憂い、きわめて冷静に“本来の教育は母語で行われるべきである”、と述べた。森とは正反対の意見だが、「ニホン英語」の思想的原点として、これは注目に値する。筆者が母語としての日本語を“*Closed Japanese*”とし、「ニホン英語」を“*Open Japanese*”と銘名するゆえんである。モルレーはさらに、日本は2千年以上もの歴史ある文化から育まれた自国の言語をもち、植民地ではないのだから、独立国らしく母語による学問形態をとれ、という。この警告に目覚めたのか、帝国大学など全教科を英語で教えることを誇りとしてきた授業形態は、これ以降次第に消滅してゆく。

ところで現在も形としては独立国の日本が、モルレーの指摘から130年もたっていないながら、政治面でも英語教育の面でもいまだにアメリカの真似を続けているのだが、この指摘を推し進めて、“独立国の日本”英米英語の真似ではなく、なぜ独立国らしい日本人に相応しい英語を使わないのか、という自由思想を導き出すことは不可能ではないだろう。では“日本がとるべき独立国らしい英語”とはいったいどんな英語であろうか。論を進めながら読者とともに考えてみたい。

次に1876年(明治9年)以来日本の医学教育に大きな貢献をしてきたE. ベルツは、当時の井上文相に日本の教育の欠陥を指摘した。それは日本の若者たちは苛酷な英語学習に耐えられず苦しみ、それでもなお勉強する割りに体力が足りないから、卒業すると命を落とす人がたくさんいるというものであった(川澄p33)。ベルツが外国語教師ではなく医者立場であったからこそ、英語をはじめとする独・仏語に重点を置きすぎる授業形態に対して、こうして忌憚なく苦言を述べることができたのである。

こうして政府をはじめ日本人もこの英語教育の異常さにやっと気がつき始めたのか、それとも彼らの勇気に発奮したのか、夏目漱石も1892年(明治25年)の論文で、バカバカしいと思うほどの時間を外国語のために奪われ、結局は専門を修める時間がなくなってしまう、と書いている。さらに福澤諭吉も自伝の中で、文部の英語教授法をこのままにしておけば「生徒を殺すに極まっている。殺さなければ気がおかしくなるか、然らざれば心身ともに衰弱して半死半生」になってしまうといい、あげくは名指しで東京大学を「少年の健康屠

殺場」とたとえた。

1879年(明治12年)学制を廃止し、教育令を制定、最初の教育令を制定した。そこでは修業年限4年の初等中学科でさえ、英語は各学年毎週6,6,6,6時間と圧倒的に多い教科で、算術や地理のほぼ5倍となっている(櫻井p130)。ベルツの指摘に井上文相はその後、外国語の授業時間を減らし、講義をできるだけ日本語で行うことによって、この教育上の欠陥を改めようと努力したが、もはや遅きに失したようで、以下のような辛らつな意見が次々と世情を巻き込んだ。

たとえば『東京朝日』に戸川秋骨が、青年の精神を英語に傾倒させ、発育期を苦しめることは、大いに考えるべきことだと論説(1880年(明治13年)した(櫻井p274)。英文学者の身でありながら思い切った意見であった。その翌年(1881年(明治14年))若宮卯之助が雑誌『日本』で外国語教育の動機は正しいが、方向が間違っていると指摘。それは①英語学習を強制した結果、大多数が外国語の主人にはなれないで、却ってその奴隷となるに至った。②英語の真似のために一切が犠牲にされていると警告した(櫻井p276)。外国語教育に対する「方向性」の間違いを糾した論文はこれが初めてと考えられる。貴重な資料である。

また東京朝日社会部長で俳人でもあった渋川玄耳は、1880年(明治13年)、『中央公論』で、①中学の英語教育は時間と“脳力”の浪費であり、②中学卒業生の常識の乏しいのは英語に多くの時間を費やすためであり、③日本語を少々間違っても放置し、英語の綴りや発音を少しでも誤れば嘲笑される。こうして英語が国語以上に尊重せられるのは本末転倒であり、④外国模倣は進んで外国崇拜となり、見栄と贅沢を誘発することになる、と警告した(櫻井p275)。

ことばの土台

さらに1882年、東京大学理学部の矢田部良吉は“どの国の言語でも一朝一夕にしてできあがったものではなく、本来その風土や風習、人情など文化によって異なるものだから、英語は英国人、仏語はフランス人、中国語は中国人に適している(川澄p26)”と、暗に森有礼の英語採用論に反対した。この指摘から察すると、英語圏以外の国の人々から見た英語観も、「英米人には英米語が一番似合っている」のだから、同じようにインド人にはインド英語が、中国人には中国英語が、そしてフランス人にはフランス英語がすでに古くから根付いていると考えるのが自然だ。この論をもう一步進めると「日本にも日本らしい英語、つまり日本人にふさわしいニホン英語がすでに100年も前からあるのだから、それを使うのが自然」という、筆者の「ニホン英語」の考え方の先駆けとなる発想だといえるかもしれない。そもそも人類はそれぞれ先祖の代から骨格が、筋肉が、唾液の濃さまで母語に、あるいは互いが適合するようにでき上がっているというのが筆者の仮説(末

延2006)である。

同じように、森鷗外は1887年(明治20年)『西欧の衝撃と日本』(平川祐弘訳 p 187、川澄 p 30)の中で「文明は歴史的基礎の上に立脚している。西洋のでき上がった理想を日本へそのまま持ってきても、その実現は不可能事に属する」と書いた。「文明」と「理想」を「言語」に置き換えてみるといい。菊池寛も同じことを言っているが、過去50年近く「ニホン英語」を提唱してきた筆者には、この鷗外のことばには「日本には日本人らしい英語がある」ということを、暗にほのめかしていると思える。これこそ「ニホン英語」の基本的、根源的な先駆的発想だと言っているのではないだろうか。川澄哲夫は『資料英学史2』のなかで、鷗外のこのことばを以って森有礼の論争は姿を消すことになったと述べている(川澄 p 31)。

さてこうした批判に対して、英語熱は止むどころか、政府は1884年には一部地域の小学校の教科に「英語の初歩」科目を加設した。そして1885年には中学校教育令では外国語(英・独・仏)選択として英語を課し、さらに翌年には小学校令により、一部地域に英語を選択させた。また中学校令により、第一外国語(英語)が必修となり、授業時間は1学年から5学年まで毎週各6,6,7,5,5時間となった。高等中学校では第一外国語(英語)必修となり、各年毎週4時間となった(櫻井p146)。

このころ(1884年 明治17年)キリスト教徒として理想の「聖地」を求め、アメリカに渡った若き内村鑑三が見たものは、白人たちがネイティブ・アメリカンや、奴隷としての黒人たちを相手に行ってきた強烈な人種差別、政治的腐敗、競争原理、賭博、酒乱、とてつもない貧富差のアメリカであった。これはすでに岩倉具視一行が1871年に経験し、指摘したことでもあったし、それは21世紀の今も変わらない。

第3章 英文法学者の台頭

第1節 英文法至上教育へ

英語を使うには英文法は大切だ。英文法は英語の“骨組み”だからこれさえやればどんな英語にも対応できると、多くの文法学者たちが信じ、それを現場で教えてきた。でも確かに骨組みはできたように感じたが、“身”につかなかったという話は多い。言語学習のみならず、あらゆるたとえ話には土台としての骨格の重要性が先行されるが、発生的にも先に「身」があってこそそこに「骨」が形成されるのだ(末延2006)。

さて1889年には大日本帝国憲法が公布され、後に文相となった国語学者井上毅は、加速する日本人の欧米熱を冷ませるために、中学校では第二外国語(独・仏)を廃して、代わりに必修英語を増やし、1学年から5学年まで授業時間を毎週各6,7,7,7,7時間とした。

1894年、高等学校は「高等学校大学予科規定」を定め、これを三部に分け、第一外国語では第1年から第3年まで毎週各9,8,8時間とした(櫻井p166)。

世間では英語の推進よりむしろ英語学習者の精神衛生問題が話題になってきたのとは裏腹に、英文法学者増田藤之助が編集する『日本英学新誌』では、1892年(明治25年)英語学習の効用を書いた。それによると、英語は

- ① 学問として知識と訓練、道徳的効用があり、
- ② なかでも語文面ではその高尚な観念、尊貴な思想といった精神的空気が漂い、
- ③ 学習する者の精神的生活の健康増進に影響するという。
- ④ 他方、文学の面では、その敬虔、純潔、莊重、謹厚の理念、雄大の理想において和漢書の比ではなく、清潔高貴さに秀でており、
- ⑤ 学習する者の徳性を涵養し、
- ⑥ 品格を発達させ、
- ⑦ 道徳的訓練の面で最も健全な道である(高梨pp19-22, pp208-9)、と齒の浮くような説得がなされている。

さて、①②は英語を学習すれば自動的にそのすべてに効用があると謳ったものだろうが、これは当時の教育哲学の三要素「知・徳・敬」の単なるコピーで、③~⑥は逆に若者たちの精神と身体に“負の影響”を与え、逆に品格が落ち高慢になりがちなのは、現在も多くが認めているところだ。⑦は英語は教師が生徒を従順にさせるための道徳的訓練を強要する道具となり、そこで選ばれた一部の生徒がやがて英語教員となるという、封建主義のきわめて悪質な循環の名残りを窺がわせるが、このしがらみも現在の英語教育に根深く浸透している。こうした英語・英文学者たちの舞い上がった自画自賛的傾向とこれらの重厚な用語が、以後も吟味・証明されることもなく、すんなりと英語教育者たちの間でもてはやされ、後々の文部省指導要領の貴重な必修攻略のための材料、武器として受け継がれてゆくことになる。

第2節 正則英語

こうした英文法学者たちの文法礼賛の中、英文法学者の斉藤秀三郎は1896年(明治29年)正則英語学校を設立する。正則と銘打つくらいだから、彼らの英語に対する基本的概念は、次のような完璧を目指すものであっただろうと思われる。すなわち、

「元来、ことば(ロゴス)は聖書の創世記に記されているように、神が創造したものだから神聖なものである。なかでも英語は数多くの受難の中、英国人の中で長い時間をかけて造られ、大切に使われてきたのだから、それは正真正銘の英国人の所有物であり、英国人の英語こそ唯一正しい英語だ。だからその英語を学ぼうとする日本人は、英国人の英語を

敬い、神の創造物だから発音や文法を誤ることは罪であるから絶対にそれを避け、完璧な形を学んだ上で使わなくてはならない。」

これはいわば英国の食べ物をそっくりそのまま輸入して、英国の料理人が日本人の前で料理し、その方法を完璧に真似させ、西洋式のテーブルでナイフとフォークを使って食べさせるという贅沢な教授法であり、これはいわば“英国人クローン人間”の養成だ。このころ日本は、長い間文化面で恩恵を受けてきた清国に対し日清戦争(1894-5)に勝利すると、さらに日露戦争(1904-5)に勝って自信は絶頂となる。

第3節 英文法教育批判

1897年(明治30年)こうしたハイカラな英語ブームの裏で、外山正一は『英語教授法』で、いまだ英語を知らない児童たちに、最初から重文や複文を平気で課することは、幼者な頭脳を苦しめることであり、また生徒の学力に比して理解の困難な教科書を用いることが、いかに間違っているかを説く(櫻井p190)。さらに中学を卒業しても力不足の原因は、教員、教授法、教科書の不完全であり、中でも外国で作られた教科書を日本人のために使うのは不適當だ、と厳しい筆致で断罪する(高梨p88)。

学習者の立場に立った勇氣ある挑戦であり、これは日本の英語教育における「学習者論」、つまり教える側からでなく、学ぶ側から見た英語教育論の先駆けであり、「ニホン英語」の根底を流れる思想でもある。J.A.コメニウスは「多くの者が知識の山に登れないのは頭が悪いためではなく、足場が悪いため、つまり教育の方法がまずいためである」という(12章15節梅根p99)。

1897年(明治30年)、文部省は図書審査官を置き、教科書の取締りを厳しくした。これが1932年の教科書検定制度につながってゆく。そして1899年(明治32年)、内村鑑三は『外国語之研究』(櫻井p191)のなかで英語の意義とその“美”を説く。外国語を学習するには「忍耐」「暗記」「執拗」が必要であり、動詞の「不規則変化」「発音」を怠らず、最良書として最も荘厳な『聖書』を読めと。

これは前述のように神が創造したとすることば(ロゴス)を学ぶに、一切間違ふことなく執拗に忍耐・暗記を持って完璧を求め、よもや間違えれば神への反逆者として罪人とみなすという欧米宗教、中でも一神教の典型的な言語観、言語教育観であり、いままで日本から英米への留学者たちが身を以って習得し持ち帰ったが、これは英語教育にとってはきわめて厄介な基本原理であり、21世紀の今にもひきずっている問題である。一方、敬虔な宗教家でもあったJ.A.コメニウスは『最新言語教授法』の一般原則の中で「慎重に学習してものはじめのうちは誤らないで学ぶことはできない(梅根p152)」といている。

ところが仏文学者の岸田国士が「これまで日本人は英語を英国人のように口真似して使

うのが理想とされてきたが、内村鑑三が言ってきたように、これからは日本人として日本流に英語を使いこなすことが大切だということからすれば、内村は後に宗旨を変えて寛容さをもつに至ったのではないと思われる。ちなみにJ.A.コメニウスは17世紀に「忍耐」を「子供らが不断に仕事や遊びに没頭することによって得られる(23章梅根p131)」と、さらに「暗記」は「格律暗誦主義を排す(梅根p132)」ときっぱりいつている。

さて英学界では、まるで巷の英文法教育を批判するかのように、1901年(明治34年)H.スワン(Harold Swan)が、フランス人のF.グアン(Francois Gouin)によって考案された自然な母親教授法ともいえる言語教授法グアン・メソッド(Natural Method, or Psychological Method)を導入する。ところが英文法学者の高橋五郎がそれを実証するまでもなく自著『最新英語教授法』の中で、日本人の大人や若者に対してあまりにも幼稚で軽蔑的な教授法だとし、あっけなく「愚案」と決めつけ、せつかくの英語教育の座から引きずり落としてしまう。しかしこの精神はH.E.パーマーのOral Method, C.C.フリーズのOral Approachに引き継がれる。

そして1902年(明治35年)、文部省が視学官を置くことになり(櫻井pp192-4)、中学校教授要目を定める。同年、R.B.マッケローが『英語発音学』(東京上田屋書店)で現在の国際表音文字に近い発音記号を紹介したが、あまりに不自然にして複雑なため、強い抵抗感を与えて失敗した。

岡倉の英文法批判

今まで日本の目指す英語教育のあり方に苦悩してきた岡倉由三郎は1905年、帝国教育会で「中学校における英語教授法」と題して講演を行った。そこでは学校教育に英語が採用されはじめた直後から、優遇され続けてきた英文法研究のお陰で、これまで日本国中にはびこってきた文法偏重の授業形態を次のように批判した。

- ① 英語という名の下に、実は国語を教えているではないか。
- ② 実際の運用面を考えると、教えるのは文法のみで語の応用をやっていない。水泳を教えるのに水の理化学的講義ばかりで、水に浮かばせようとしていない。
- ③ 表向きには文法知識・文法用語をできるだけ避け、無意識に浸透させるべき。

というものであった(高梨p212)。

これは当時としては英語教育の方法論として、教育心理学的にも画期的な批評で、その基盤となったのはJ.A.コメニウスの影響があると考えられる。ちなみに『大教授学』第22章によると「文法の規則(の説明)よりも実行によって学べ。規則は実行によって学んだ知識を助け、強める役をするものである(Pattern Practice の概念に通じる)。規則は文法的であるべく哲学的であってはならない。規則を学ぶには既知の規則を基にしそれとの違い

に重点をおけ (Contrastの概念に通ずる)。()内は筆者(『大教授学』以下同梅根p130)」とある。この年から約30年を経てH.EパーマーやC.C.フリーズが来日し、岡倉が目指していたであろうPattern PracticeやContrastの概念を、実際に日本に導入を試みる。

また岡倉はJ.A.コメニウスがボヘミアの諺を使って「訓練のない学校は水のない水車のようなものである。(26章梅根p133)」や「学校の秩序(技術)は自然から教わるべきである。(14章梅根p104)」として、水泳術やサイホンの原理を応用した技術を例にし、「それは技術であるけれども、しかし自然的である。なぜなら装置(パイプの中を通すという装置)は技術であるけれども、生じている現象は自然の現象だからである。(14章5節梅根p105)」と言語教育に水のたとえが多い。

そして翌年岡倉は『英語発音学大綱』を出版する。これによって英語教師、学習者に英語教育の指針、理想の姿として日本の若者にネイティブ発音の模倣を求めることになる。こうして発音熱が高揚すると、政府も1911(明治44年)中学校教授要目の改正を行い、当然のこととしてまず「発音重視」、中でも発音学習は最初の段階が大切ということとなり、以来今日まで教科書の裏表紙には音声学的説明図と、教室には理科室の解剖図のような発音図を掲げさせることとなった(櫻井p199)。

こんな中で1911年(明治44年)、岡倉は博文館から英語教育雑誌『英語教育』を刊行した。その中で彼をはじめとする英語文法学者たちは、学生たちが英語ができない原因(p44)は、彼らが家に帰って予習・復習をしていないからだとし、これを改善するためには

- (1) 外国語の知識がない者は屈辱だという観念を学生に知らしめること
- (2) 学生に英文学の本や外国の絵画写真を購入させ、外国語に興味を起こさせる
- (3) 父兄が家庭で常に外国語書を手にし、これを耽読すべき

とする。

さて(1)は今でいう動機付けに当たるが、そこには立身出世主義が垣間見える。(2)は視聴覚教育の走りともいえようか。(3)は家庭において保護者にレディネスを要求するものであり、いずれもJ.A.コメニウスの影響が見られる点で新鮮さが見られる。

第4節 受験英語のはじまり

世が英文法一色という時代には、それに相応しい商売が現れる。今では4兆～7兆円とも言われる受験英語産業である。その元祖といえば、英国文芸の美しい文章を“切り刻んだ”といわれる、学習院大学教授南日恒太郎の『難問分類英文詳解』が語り伝えられているが、1913年(大正2年)齊藤秀三郎の愛弟子山崎貞は恩師齊藤の『新標準英文典』(正則英語学校出版部 昭和9年)を模した、受験英語の極みともいえる『自修英文典』を出版した。冠詞など英文法の細かい約束事を徹に入り細に入り解説した英文法書で、筆者を含

めこれ一冊で大学合格などというような宣伝を鵜呑みにした受験生が多かったし、今も多い。つまり100年も経た今も、基本的にはこれをもとに全国の入試は出題されているということだ。そしてその中身といえ、いったい大学の授業でこれ以上何を教えるのかと問い正したいほどの、また大学卒業生、大学院生、あるいは現場の英語教師でさえ解けない難問奇問が含まれており、思い余った受験生たちはこれらを「悪魔退治ゲーム」と呼んで対応しているようだ。

同じ年、全国に散在する約280名の英語教員たちによって、はじめて英語教員大会が開催された。そこでは世間の英語教育批判に応えようと、①生徒にいつそう深き同情を抱くこと、②文法指導は控えめにすること、③生徒の能力に適応した授業をすること、④発音に注意すること、⑤反復練習を行う、などを決議した。

翌1914年(大正3年)、第一次世界大戦が勃発する。文部視官櫻井役はその著『日本英語教育史稿』に「明治年間前期は欧米学術の模倣・理解の時期、後期は同化・応用の時期だった。大正は西洋から独立の時期・・・学問の独立のために絶好なる機会を提供された(櫻井p205)」と記した。大戦とはいえこの「学問の独立のために絶好の機会」の中に、櫻井が日本の英語教育が、英米だけでなく日本の英文法・英文学者たちからも独立することを、どれほど期待していたかが伺える。

斉藤の英文法礼賛

同年1914年(大正3年)、前述の正則英語で名をはせた斉藤秀三郎が、第2回英語教育大会で講演を行った。これをまとめた『英語之日本7-5』によると、英語は「簡潔で美しく、荘重なことばであって、靈感によって書かれる詩にもふさわしく・・・」よって「日本人の英語教師たるものは、哲学者であると同時に詩人でもあり、賢者でもあらねばならぬ」と。

英語の研究とは、「人類の中で英国人と称せられる者、・・・西洋の人間世界を代表する一局面を研究することである」と。およそ英文法という学問の、科学者としては不似合いな、歯の浮くような言語的に根拠の乏しい、英語そのものに酔っているとしか思えない美辞麗句が、多分後々の文部省英語指導要領の、また英語存廃論争の擁護のための素材となってゆき、そこから育ってゆく受験英語ならぬ“受難英語”がますます世にはばかることになる。

そして最後に英語の教養的価値として、「習得が難しければ難しいほど、習得の価値は大きくなる」ものであると締めくくった(高梨pp214-7)。斉藤の理念とする外国語教育におけるこの考え方は、「毒性のきつい薬ほどよく効く」のたとえのように、教育の目標からは程遠く、スパルタ的で、苛酷、強制、そして無慈悲に捻じ曲げられた陰気で恠しい思惑であって、人類の求める優しさや楽しさとはまったく逆の次元、負の教育である。いみじくもコメニウスは言う。「鞭打ち、苛酷さ、強制なしに、出来るだけ優しく(levissime)、

楽しく (*mollissime*)、そしてあたかも自ずから成るが如くに (*quasi sua sponte*) なさるべきである…教育は労苦に満ちたものではなく、容易なものでなければならぬ。(12章梅根 p94)」と。しかしそれは悲しいことに、現今の多くの英語学者や英語産業、教師たちが策略する「受験英語」は、難解であるほどその利益が大きく、学習者からすればますます“受難英語”へとつながっている。

第5節 イディオムとスラングの氾濫

翌1915年には英文法ブームの波に乗り、日本人でありながら完ぺきなネイティブを夢見たであろう齊藤秀三郎は、英単語辞典では飽き足らず、英国人の日常の微妙な心の動きを映すといわれるイディオムやスラングを集めて、弟子とともに念願の『熟語本位英和中辞典』を出版する。これは齊藤流の“英語慣用語法学”から生まれたもので、英米人、英米文化独特の生活の中からこそ生まれてきたであろう、何万という慣用の熟語(イディオム)や俗語・卑語・隠語などスラング(たとえばkick the bucket死ぬ)の宝庫であり、集大成であった。そしてこれこそが彼らが唱え続けてきた“日本語ではとても表せない微妙な英語のニュアンス”“匂い”とでも言える証拠物のひとつであったのだろう。当時としてはこれほどの慣用句のコレクションを、しかも日本人がやるのは大変な苦勞を伴ったことは、われわれの想像を絶する。

だが想像するがいい。この齊藤の英和中辞典は当時としては日本人にとってはまるで中国の至宝『康熙字典』をはるかに上回る規模といわれる『大漢和辞典』、それは日本人漢学者諸橋轍次が延べ26万人を動員して完成した親字5万、熟語52万余を擁するという、国の宝にさえ匹敵するほどの偉大な英和辞典であったようだ。

しかし日本人、日本文化の中からではなく、ここには英米人、英米文化の中で生まれた数十万もの生活用語がほぼ満遍なく収められ、時には清少納言が漢語の知識をちらつかせて「香炉峰の雪はいかに」など口にしたような、ほんのいくつかの英国の由緒ある熟語を日本人が使えることが教養のステイタス・シンボルであり、その一つ一つに西洋文明、英国文化の精神が宿っており、それらが同時に英語を必修とされた国民の目標となるという。元来、辞書というものは分からない語に出くわしたときに調べるためにある。だからそれは日本の英文法・英文学者や英語教師にとって確かに有益ではあろう。

ところがこれらは「男性的にたくましく、力強き」ものとして、日本人の学習者すべてがこれを尊び、自由に使えてこそ、真の英国人、理想の英国紳士に近づくことができると齊藤は主張した。これが英語学習の「実用価値」「教養価値」の大切な意義付けだ。こうしてまもなくイディオムやスラングは大きなブームとなったが、坪内逍遙は、『早稲田文学』第1号(明治24年)に、ある大学の設問を次のように評している。「奇句奇語を連ねて英語

学の力を検するなり。…異様な字面を試験中に加えて以って学力を検証とするに至りては、吾人その本意をいぶかり疑う。(高梨p208)』

また岸田国土(川澄p644)は「イディオムなどというものは日本人が無理に使ふのは不思議だ。…むしろ日本人でなければ表せないものの考え方…」というような英語をつかうべきである。」と。これは「ニホン英語」の先駆けとなる言論である。さらに驚くなかれ最近では入試にイディオムだけでなく、最近では「ペチャクチャ」などオノマトペまで入ってきた。これを研究したいのならやればいい。でも英語特有のこうしたものまでを入試に出題して、日本の学生に強制し、もてあそぶのは狂気の沙汰だ。遊び半分ならともかく、英米独特のしぐさを真似させ、動物の泣き声、あくびやくしゃみまでアメリカ人らしくなどと授業で真似させる海外留学経験の教師が、雨後のタケノコのように出てきた。

くり返すが、そもそも辞書というものは、分からないところを調べるために編まれたものだ。ところが最近の大学入試の出題傾向を見ても、少々の手心はかけてはいるとしても、出題者が手当たりしだいに何万ものイディオムの中から、どれかまわず入試に出題するのは、極めて誤った危険な使い方だ。受験者は辞典丸ごと覚えさせられるという恐怖にさらされる。かりに諸橋の漢和辞典のどこから出題されるか分からないというそれに似た恐怖は、たとえ受験者でなくとも分かりきったことだ。こうしてイディオムやスラングの出現は、英語を却って余計に難しくさせてしまうことになりかねないし、若者に過度な重荷を背負わせることになってゆき、今日はその度合いが頂点に達している。

第6節 イディオムを弄ぶ人たち

たまたま近所の高校生が、某大学の2005年入試問題の“run the gamut of~”の意味が分からないという。筆者は何を隠そう、このようなイディオムには無知であった。例の斉藤熟語辞典を引くと、例文にはthe whole gamut of crime(=罪の全貌)とあり、これが“~の全部を経験する”という意味になるらしい。出題者に問いたい。英語教師として60年近く、出題者には高校生にもわかる筈だと信じていたであろうこのイディオムに、文脈からも判断できず無知だった自分をどれだけ鞭打てば許されるのか、どれほど恥ずべきであるかを。それにしても人生のまだ5分の1も経験していない受験生たちには、あまりにも酷な出題ではないか。

同じく某大学の入試問題で、Can I drop () your office ?の場合、解説書によれば答はinでもatでもbyでもなく、overしかないという。drop in, drop by, drop over ならどれも「~に立ち寄る」の意味だが、(drop byは自動詞用法と他動詞用法があるが)drop in は自動詞用法のみで、drop in on +人、drop in at +場所のようにして前置詞+目的語を従えるのが普通だという。高校生はぼつんと言った。「僕なら“Can I your office?”でも判る」と。

どれもvisitではどうしていけないのだろう。visit といえばわかる表現を、ちょっとしたニュアンスの違いを強調してpay a visitなどと覚えさせるが、むしろ「お宮参り」の“参る”がvisit に当たると推理させた方がいい。必修科目で入試英語という道具を使って自分たちの権威のため弱者を弄ぶ。人はこんなにも残酷なものか。そうでなければこんな無謀な出題が高校生に出題されるはずがない。料理人がどんな料理を出してもいいわけではないように、教師がどんな難問題を出してもいいのではない。創設者ならどう考えるだろう。思いをめぐらすばかりである。

英語お宅の講師たち

さらにラジオやテレビの英語、英会話講座ではイディオムの花盛りだ。「言いたいことを効率よく表現するためには、英語に特有なやり取りのパターン、決まり文句やイディオムなどを学ぶことが欠かせません」からだという。この“効率よく表現する”というのが曲者である。ラジオやテレビの英会話講師の座を獲得するには、“効率のよい表現”として最新のイディオムの知識を持っていることが必須条件だそうで、講師たちは何度も米国に渡り、現地の流行の表現を持ち帰って得意気に披露する。

“He is interested in music.” といえいいものをわざわざ “He’s musically inclined.”、そして “Do you want to drink some coffee?” は “Want to grab a coffee?” となり、これをターゲットにして練習させる。思わず腰が抜けそうになった。冗談でならともかく、日本人の初学者にこんなイディオムを使わせるとは。恥ずかしくて背筋に寒気を覚えるだけでなく、「これが効率のか？」と疑問を抱くのは筆者だけではないだろう。

言いたいことを“効率よく”表現するために、「逮捕される」をarrested やcaught でいいものをわざわざbe apprehendedに、そして「現行犯逮捕」はbe caught red-handedとなり、「服役する」はdo time、「付きまとう」はdog と教えるものだから、万が一逮捕されたときでも安心して使えるのだろうが、ここまで度が過ぎればもはや“英語お宅”の段階だ。また、「ためた小物古物」はknickknacks accumulatedというがused articles collectedでは駄目なのか。「めっちゃ安い」はvery cheap かと思えばdirt cheap、「思い当たる節がない」はnot ring a bell、「思いっきり」はbelt out、「(腹を割って)お金の話をする」はtalk turkey、「散財する」はshell out、オノマトペの「ダラダラ」はfiddle around、(お腹が)「キリキリ」はin knots、「なんたらかんたら」はall that jazz。これがほぼ初級程度の英会話というのでは、“英語お宅”などもってのほかの筆者には、手が出ないどころか拷問を受けたとしても使いたくない。本来会話というものはこんなキザで下品な“教養比べ”ではないのだが、日本国中の毎朝の英語番組はこんな表現で満ちている。

第7節 イディオムの危険性

イディオムの多くはスラングと同じように国際的に共通ではない。第一に、元はといえば特定の文化の中で使われる機知に富んだ表現方法でもあり、あるいは将棋の世界の「一目置く」とか「駄目の一手」などのように、特殊なグループだけの使う暗号のようなものだ。後者の場合はむしろ他人に分からなくさせるためのものも多く、仲間ではない人と区別するもので、場合によってはそれを知らないと馬鹿にされることもある。古い漢字や四文字漢字を使って煙に巻く輩と同じ体質だ。第二に、日本の英語教育では異常なほどにイディオムやスラングを重視するために、使わなければ英米人の仲間はずれになるのではと心配させるが、それは間違いだ。みだりに使うと、特に英米以外の国々では、かえってヒンシュクを買うことが多い。

第三に、込み入ったイディオムで表現をすれば、話し相手はこちらがよほど英語がうまい人だと勘違いしてしまい、安心してぺらぺらと話してくるので、話の後が続かなくなるという点で危険である。第四に、“目黒のさんま”のように、使い方を間違えると厄介な可能性を秘めている。場合によっては、「いてもたろか」などという関西人の慣用句を、時には関東の人が面白おかしく、あるいは軽蔑的に使う場合の危険さどころの異様さではない。

第五に、これは個人的な考えだが、隣人の文化に土足で踏み込むより、そばから理解してあげる程度でいいのであって、お互いにあまりにも馴れ馴れしく使うより、大事にそっとしておきたいものだ。だからこんな隠語を10万でも20万でも知っていてそれを自慢する“英語お宅”を戒めるつもりは毛頭ないが、それを学習者に強要するべきものでは決してない。ましてや公共の電波でこれでもかと、むやみに日本全国に広めるのは控えたいものだ。

この練習のあとにラジオもテレビも“リダクション(筆記体)”という、発音の“効率”を目指して、map, mat, math, mac, manをどれも“マツ”といわせ、get up やget out, get it, get in を“ゲタ”とアメリカ人らしくペランメー調でいわせて、ついには聞き手をわざわざ困らせるための練習(?)が延々と続く。チョムスキー博士が来日して一番驚きあきれたのは、ラジオやテレビ英語番組が、自分たちでさえ使うのをはばかるようなイディオムとリダクションだらけだったと言っていた。状況や使い方によっては危険きわまるイディオムやリダクションを、続々と得意げに全国に吐き出し、小気味悪い“英語お宅”や“アメリカお宅”を量産、これらが自然と重要表現とみなされるうちに、受難英語の一端を飾る要因になっている。

さて、福澤諭吉は『学問のすすめ』で、軽々しく他人の意志に従う人間の不道理について述べている。「よく「目上の人には自分の意志を通さず、言われたようにするほうがいい」

という人がいる。でもそうすると上の人は下の人の魂を勝手に動かして、その魂を自分のものにしようとする…。そのために今日では、強い者は弱い者を脅すような社会の風潮になってしまった。これがいったい“天の理”であろうか」というのだ。この論理でゆけば、日本の英語教育では英語のうまい英米人が、日本人の魂を自分の思い通りに動かして自分の身体に宿らせる、ということになり、学校の現場ではその片棒を日本人の教師が担いで、生徒の魂を弄ぶということになる。

そして2015年の今も、この奇句奇語に悩まされ、挙句には英語から遠ざかり、ついには恨みさえ抱く若者たちが何千万人もいることを、英語教師や放送関係者たちは寸時も忘れてはならない。ここで筆者の大胆な私見だが、拙著(末延 2010)にも記したように、筆者は古くから、日本の英語界が斉藤のよう熟語・スラング辞典を必要以上に重要視する傾向に対して異見を貫いてきた。少々長いがそこに記した文を一部掲載する。

「かつて日本を代表した明治の英文法学者斉藤秀三郎はイディオモロジー (idiomology) という学問を考え出した。それは英米人どうしの会話の中で考え出された、仲間同士でしか分からないような特有文化の産物である英語のイディオム(慣用句)を、日本人が譲り受けて、それを英米人そのままに真似る努力をすることによって、少しでも英語に近づきたいという、「英語らしさ」を追求するものであったのだろう。英米人の使う英語にあこがれ、英語ということばの中にこそ、『ほんまもの英語』の姿があると信じて、それを見つけ出し、日本中の人たちに使わせたかったのだろう。ネイティブの『英語らしさ』を英語教育の最大の目標として追及するこの思想は、今もそっくりそのまま現在の文部科学省に引き継がれている。」

斉藤のイディオム辞典の栄光は永遠であろう。だが問題はその使い方である。筆者は一般の日本人の英語学習者にとって、その95%以上はわざわざ覚える必要はないと判断する。2~300もあれば十分だ。たとえば中学の英語教科書にはほんの50程度しかないが、それでも英米での日常の生活には事足りるし、後は自然に入ってくる。しかしそれでもという人は自由だ。

第4章 英語排斥論

第1節 外国専門家の来日

明治後期から大正中期にかけて、日本では英語排斥論が一層ふえた。それはアメリカで日本人の移民をすべて禁止するという「移民法改正」などの影響で、排米運動が盛り上がっていたからでもあったが、1916年(大正5年)元文相の大岡育造は『教育時論』に、必修外国語を除却すべきと論じた(櫻井p231)。その理由は次のとおりである。

- (1) 独立国としての日本が外国の言語を必修にする理由は断じてない。
- (2) 日本は明治初年から英国化して、過度に尊信してきた。
- (3) 生徒の苦痛を減少させる。
- (4) 教育費の負担を軽減させる。
- (5) 時間の節約。
- (6) 除却の代わりに翻訳局を設ける。

これに対して同年1916年法律家の浮田和民は、①外国語学習は国民の独立精神を危うくするほどのものではない。②教え方さえしっかりしておれば、英語も必要である。③しかし必修には他の大筋と同様、ほぼ反対という意見であった。

1917年には東大教授のモースが、学生の観察記録 *Japan Day by Day* の中で、学生たちの英語は「実にしっかりしていて、私には全部判る」と観察している。学生たちの英語が当時どんなものであったかという記録が乏しい中で、外国人教師たちは学生たちのまじめなポツポツと話す日本訛りの「ニホン英語」を、ほとんどすべて理解できたと思われる。モースの“発音や文法に皮相的な違いがあっても内容が大切”とする言語の寛容精神は、後の「ニホン英語」発展に大いに資するものがある。

1917年(大正6年)ロンドン大学D.ジョーンズの *English Pronouncing Dictionary* が刊行され、発音はいよいよ完璧を求めるようになる。これは英国に忠誠を誓わせる“踏み絵”として帝国の全植民地、そして日本にもばら撒かれた。大英帝国英語完ぺき主義者の彼はいう。Mapの語尾に母音をつけて“マップ”と発音するような日本人は一番下手だと。それに刺激されたのか早期からの完全発音を目指して1919年(大正8年)さっそく小学校令が改正となり、外国語が選択科目となった。同じく中学校令が改正され、外国語が1年から5年生まで毎週各6,7,7,5,5時間となり、高等学校令を定め、尋常科では外国語が1年から4年生まで毎週各6,7,6,6時間となった。同年、私立の設置を認めたため、志望者が急増(明治20年の1万名から大正8年には17万名)、「多数の青年は過度の勉強によって健康を害ひ、或は志を得ずして放浪するものが出た」という。また同年、高等学校教員規定を定め、教員免許、教員検定試験制度を定めた。

1922年(大正11年)、日本の英語教育に大改革を起こすかもしれないなかった、英国の言語教授法の専門家H.E.パーマーが来日する。しかし後述するが、以後10年にわたり教授法に関して福原麟太郎ら東京帝大の英文学教授たちからの大攻撃を受けることになる。そんな中1926年(昭和元年)JOAKラヂオ講座開講とともに英語の初等講座が開始。現在もテレビ講座とともに続いているが、先にイディオムの項で述べたように、すでに90年が経とうとしながら、どちらも完璧なアメリカ英語発音と文法の習得を目標に、生まれては泡と消える慣用句やスラングなどに重点を置く。

第2節 藤村の英語科処分論

そして1927年(昭和2年)雑誌『現代』5月号に日本の英語教師や英語・英文学界を震撼させる論文が発表される。国文学者で東京帝国大学教授の藤村作(川澄p48, p231)の「英語科処分の急務」である。その内容は、

- (1) 日本文化はもはや欧米先進国を指導すべき地位に達しているから、これ以上英語教育の必要はない。
- (2) 授業形態は暗記模倣にのみ走り、独創力が乏しくなっている。昭和天皇は朝見式で「模倣の時代は過ぎた。これからは創造の時代である」と。
- (3) 全授業の3分の1を英語に捧げている中学生は、その時間と努力に比して成果が甚だしく貧弱な上、卒業後英語必要とする人は100人に1人もいない。他の教科にまわすべき。
- (4) 日本の若者が、他民族の英語が未熟だという理由で進学・進級できないというのは異常、

というのがその骨子である。

まず(1)について。欧米を相手に大胆とも取れる意見である。こうした“乳離れ現象”は、遠くは菅原道真が、「中国の属国でもないわが国が、これ以上危険を冒してまでも中国から学ぶことはない」、という理由で遣唐使の派遣を廃止した例に見られるだけでなく、福澤諭吉の『学問のすすめ』は藤村の論文より47年前に書かれた書物だが、この中でも「学問の目的」として“離乳”の必要性を次のように指摘している。

「今のわが国の学術で西洋人に教えることができるものがあるか。何もない。…外国には留学生を派遣する。国内では外国人を教師として雇う。…高い給料を払って、これに頼るところが多い。…学者の身としては恥じるべきことだ。p132。」藤村はたぶん福澤のこのことばをある程度意識してのことだろうが、130年経っても日本の英語教育いまだに英米からの離乳はできていない。それどころか、中でも英米留学経験をもつ英語教員たちのネイティブ指向への“吸着現象”が、ますます顕著に拡がりを見せている。

- (2)は、文科省のアメリカ英語模倣の潔癖主義はむしろより強力、かつ繊細になっている。
- (3)英語教育はこの一世紀以上、反省もなく英語嫌いの若者を生産し続けてきた。

(4)は信じられないことだが、逆に英語さえできれば入学できるという大学が今も筆者の身近な地域にあり、英語国民でありさえすれば誰でも入れることになる。この点で英語教育も政治も、日本は今も英米の植民地から脱していない。

第3節 藤村に対する反論

さて、藤村作の「英語科処分の急務」に対して、岡倉由三郎や東京帝大教授の市川三喜

をはじめとする英文学・英語学専門の教授たちが、こぞって以下のように反論した。

- (1) 言語の習得は打算主義や短期で実用化できない。将来の基礎として記憶力の旺盛な低学年のために、多くの時間と有能な教師を増やすべき。
- (2) 「教養」として学ばせる価値がある(東北帝大教授土居光知)。
- (3) 人間としての「品性の習得」の必要性。東京帝大教授の齊藤勇は「英国人の社会思想はもっとも『穏健』なものであり、真の自由はソビエト・ロシアにあらずして大英帝国にあると考えられる」と弁明する。
- (4) 翻訳では相手の細かい感情がわからない。
- (5) 日本語は不便な原始的な言語である。

そしてついには

- (6) 東京帝国大学教授の市川三喜は「外国語廃止というが如き暴論は、多く偏狭なる国粹主義より出発し、同じく偏狭なる思想を伝播することにおいて、却って国家のために憂うべきである」と攻撃。岡倉由三郎は英語廃止あるいは選択論者を、近視眼的で“モグラのような目玉”だと嘲笑する。彼は言う「(英語は)わが国の言葉とはなはだしく考え方の順序が異なるので、外国語の形式上の相違を知覚し、その中にある理智と感情の世界に活眼を開く事は『他の何者ももたらし得ぬ悟入覚醒』を我々に与えてくれる(川澄p239)」と。
- (7) さらに東京帝国大学英文学教授の澤村寅二郎は、「目前主義や打算主義で英語を廃止するというのは、学問の自殺に繋がりがかねない(高梨p229)」と述べた。

さてそれぞれを解釈すると、(1)は学者ならそれらしく科学的に証明されるべきだ。(2)は、これ以降多くの英学者が「英語の目的」イコール「教養」というように、この漠然とした用語を好んで使うようになった。(3)は英語の教授でありながら英国人の「品性」と「穏健さ」と「自由」が、17世紀から始まり当時まで続いていた英国人の植民地政策と奴隷制度・奴隷貿易といった卑劣さの土台の上にあったことを、岩倉や内村、荷風のように見抜けなかった。そして英国の文化と言語を模倣する日本とその国民は、その後アジアの植民地政策を目指して戦争へと向かうことになる。(4)は英語学者として言語科学的に証明する責任がある。そうでなければ独、仏、露、西語はもとより、イスラム、アラビア、ギリシャなど、あらゆる言語を翻訳し、私たちを豊かにしてくれている彼らの存在を否定することになる。(5)も森有礼の論を引きずっている。(6)は「語順」(末延 2013)の違いをこんなに神聖視するのは、言語至上主義的で近視眼的だ。英語も元は日本語のように語順がS+O+Vだったことを認識していなかったのだろう。(7)は脅しめいたもので、まるで若者の健康を憂うより、喰い種である自分の学問を優先する勢いだ。全体として、ののしるのではなく、意見を出し合って互いに知恵を分かち合う場がなくてはならない。

社会の中堅の育成

また、同年(昭和2年)東京高等師範学校英語部からの意見書(櫻井p236)では

- (1) 進んだ民族は他国の言語を学んでいる。
- (2) 英語を学んで自己を知り、他国を理解することは人類の幸福を増進する。
- (3) 通商貿易等、実用面での便益。
- (4) 自国語の洗練発達に益あり。
- (5) 社会の中堅となるための教養として必要。

と反論した。

各項目について、(1)しかしそこでさえ日本のように必修科目ではない。植民地で強制的に学ばされている国が多い事実を知らない。(2)英語とは限らない。幸福とどうつながるか。ここでは立身出世の道具がもたれ上がっている。(3)だからといって必修である必要はない。(4)証明するべきで、逆に母語の学習時間が削減され、自国語を学ぶ時間がなくなっていることは証明されている。(5)英語ということばを通じて、全人教育を推進すべきはずの師範学校の英語教育専門家たちが、この頃から実は英語教育という名の下に、英語を通じて立身出世への片棒を担ぎ、英語ができる者が優先されるという、現代の差別社会の礎となったのだろうか、ゆゆしきことである。中堅を育てるといふのなら必修にまでもする必要はない。

いずれにせよ、藤村の論文が唐突だったとはいえ、師範学校の教師にしては英文法学者や英文学者たちと寸分変わらない、ありきたりの弁明につきる。現場の教師なら、実績としての生徒の成績向上の記録をはじめ、英語に対する生徒の反応など、アンケートなどを使ったアピールをすることで世間を納得させる必要があったのではないか。なにしろ最も大切なはずの学習者の意見というのがどこにも見当たらない。師範学校には英語「教育」の専門家が乏しかった、といわざるを得ない。その点で、1942年(昭和17年)中野好夫の『英語青年』10月号の「直言する」は、権威の威力だけで学問的には全く出口のないこの混乱の中に、一抹の救いを与えてくれる。彼は「わが英語英文学界に最も欠除しているものは公開的討議の精神である。…活発な論争のないところに学問や精神の発達は断じてない。…徒らに命乞いをするにはよそうではないか(高梨p235)」という。

第4節 各界の反応

民俗学者の柳田國男は1927年(昭和2年)の『東京朝日新聞』で、当時の外国語全廃という意見について「すこぶる現代教育の患部に触れている。…中学、高校を通じて7年も8年も入用もない外国語の試験に苦しんで、やせたりやんだりする必要はない…外国語を少しも教えないのは義理が悪いというのであれば、研究所でもおけば済むことで、そ

のために青年の九割九分を苦しめるには及ばない(川澄pp376-7)」といい、同年には教養価値より若者の健康を危惧する記事が随所に見られる。これらの文面から、現在も学問的にも何の反省もなく続く「必修科目」としての“英米英語の完璧な模倣”という奴隷船を、足かせに虐げられ漕がされながら、その半分以上は死体となって大洋に投げられ、魚の餌食や藻屑となって消えてゆく…。日本の若者の英語学習に苦しむ姿が21世紀の今もなお、当時のイギリスの奴隷政策、奴隷貿易、奴隷船とイメージがかぶさってくるのは筆者だけであろうか。

この同じ年、再び藤村作が『現代』10月号で、「いったい外国人として英語の持っている匂いを、自国語に置けるように味わう力を得るまでには、どこまで学習を続けたらよいのでしょうか。中学校や高等学校などの学生に出来るものなのでしょうか。翻訳なんか駄目だ原文で読んで言語や文学の持つ、匂いや味を味わい得るために英語科が必要だとおっしゃる存置論者のさしていられる英語の学力はどう言う程度のものであろうか。又どこまで進むことを中等学校や高等学校の生徒たちに望んでおられるのであろうか。(川澄p336)」と。

教師や学者の中にも英語のネイティブと自称する人はいても、誰も現実にはいないのと同じように、この英語の微妙なニュアンスが完璧にわかる人たちがこの日本にいったい一人でもいるのだろうか。筆者は74歳の今までいまだ出会ったことがない。英語教育を牛耳る英語・英文学者たちは、この最も重要な質問に何一つ答えていない。川端康成の翻訳者として知られるサイデンスティックカーのような人は、一人いるかいなかだ。そのくせ日本人も日本の文化、“侘びさび”などはどんな外国人にもわかるはずがないなどという。

これに追い討ちをかけるように、福岡日日新聞記者金生喜造も『現代』10月号で、「見よ、ささいな文法の規則を忘れたものは、重罪を犯したものごとく叱責されているではないか。舌の曲げ方の下手な生徒は、1時間棒立ちに立たされて、いじめられ辱められ、あざけられているではないか。人々のプライドを傷つけ、人の子の素直な品性を賊うて、何の教養価値があろうぞ。生徒が中学の一年生の初めに、多大の好奇心を以って英語を迎えながら、やがてこれを嫌忌するに至るもの多きは、その罪いずれにありや。廃止論の出発する一角はこの副作用の中にあるを知らなければならぬ。…大多数の人の子に対し、実用価値よりも、教養価値よりも、精神殺害の影響のほうがはるかに大きい。(川澄p346)」と書かれているように、現在もニホン英語の使用者を罵り傘でなぐる教師(末延2003)がいる。そしてこの後も厳しい英語廃止論は続く。

第5節 正則英語と変則英語

1929年(昭和4年)、英語教育の最も重要な分野のひとつ、“どんな英語を教えるべきか”の意見がやっと持ち上がった。主要な二つのうち、はじめは神戸高等商業教授内多精一の

「発音にも眞行草の別があります(川澄p102, p495)」という提言である。当時の英語界が極端な完ぺき模倣主義の中にありながら、日本語の文字にも楷書という活字体、それに草書という筆記体の形式があるように、英語の文字や発音(中でもここでは発音)にもそれぞれ段階の違う種類があることがあり、その段階を追って学習すべきことを提唱したのである。それは暗に「日本人には活字体の英語が似合う」ということを主張したと考えられる(末延2010)。これは日本人がどんな英語を学ぶべきかをはじめて論じた画期的なもので、「ニホン英語」の観点からして実に画期的な主張であった。ましてや英語教育界にとって、世間の廃止論に対する絶好の解決策のひとつとなったはずであったが、しかし残念なことに、完璧な英国英語を目指す彼らの間では、これ以上話題に上ることはなかった。

次のひとつは同年新渡戸稲造が『英文大阪毎日』1929)の *Foreign Language in Japan* の中で「正則(regular)英語教授法」と「変則(irregular)英語教授法」の違いとその意義を論じている。「正則教授法」はネイティブの教師による直接教授法(Direct Method)で、英国のインフォーマントの話すいわゆる“正しい”英語の発音、アクセントをまるでオウムのように真似して読み・聞くことを教え学ぶ教授法である。他方「変則教授法」は、日本人教師が表層的な個々のネイティブ発音に頼らず、(ローマ字式に)文章の意味を理解する方に集中する教授法だ。新渡戸は、“変則教授法による学習者は、単なる真似で内容の真意を大雑把にしか捉えない正則教授法より、むしろ英文を明確に理解する能力を持つ”と賞賛している。この観点は英語教育にとって大変な進歩であり、文法学習にも眞・行・草があることを認め、それを賞賛したことにも繋がる。さらに内多の提案するように、発音にも活字体(楷書)と筆記体(草書)の区別があり、双方とも意義があることをも認めたと考えていいだろう。

筆者は日本人が完全なネイティブ英語にあこがれ、こだわり、自分の文化や人格を捨ててまでも完璧な真似のために現を抜かし、正則英語にすぎない必要がないどころか、現代のアイデンティティーの重要さからすれば、それらがむしろ邪魔物であることを知っている。第一、この変則英語というのは決して珍しいものではなく、好む好まないにかかわらず、日本文化の中で100年にもわたってごく自然に醸造されてきた、日本人にしてこそ使える貴重な英語であり、筆者はこれを「ニホン英語」と呼ぶ(末延1991)。ところが、変則英語教師が正則英語の教科書を使って、自分は正則英語を教えているつもりでいて、生徒の変則英語を軽蔑して笑う姿が今の日本の英語教育だ。

いずれにせよここで英語の種類に変則、正則という2つの使い分けができたという意味では言語教育学的に意義深い。社会言語学的に見ればこの場合、英国人ではない日本人にとっては変則こそが正則であり、正則こそが変則である。つまりことばは自己文化の表現とともに何にも増して丁寧でわかりやすいがもっともよい。

さて1930年 ケンブリッジ大学のC.K.オグデンによって、ベーシック英語の概念が発表される。50万、現在では800万ともいわれる英語の単語数や、掘り返されたやたらと多い熟語やイディオムと比べて、わずか850語の語数制限(その内名詞が600語)というこの考え方は、画期的でかつ科学的なものであったが、文法やイディオムの完璧さを求める英語学者たちには不評であった。

1931年、中学校令施行規則を改正し、中学上級に2種の課程を編成。毎週の時間数は各5,5,6,2,5と5,5,6,4,7時間とした。中でも英語教授の目標として、いままでに見てきた英文法・英文学の大先輩たちの“健全な思想、趣味、情操の涵養”という“慣用句”が垣間見える。1935年(昭和10年)松田文相の答弁は「中学校のみで教育をやめるような人には、あまり難しい外国語を教える必要は私はなかりろうと思う(櫻井p277)」という本音であった。

そして1933年(昭和8年)には歴史的な事柄が起こる。我が国では814年以来、遣唐使たちの努力の結果として民衆のために創り上げたカタカナが、千百年という気が遠くなるほどの長い年月の後、重い腰を上げた文部省によって「サイタ サイタ サクラガ サイタ」ではじまる尋常小学校国語教科書として世に出た(公式的には1900年には小学校で承認されてはいたが、それ以前は不明)。後述するが、このカタカナは現在でも英語教師たちからネイティブ口調の英語発音訓練の害になるものとして極度に忌み嫌われるのだが、「ニホン英語」の観点からすれば、このカタカナこそ平安時代の人々が漢字を読むときの手助けになったときのように、実は日本の英語教育をはじめアラビア語、ロシア語、タイ語などあらゆる外国語教育の発展のために、最大の近道であり助けとなる道具だと理解されるようになるには、今後やはり気の遠くなるような月日がかかるのだろうか。

第6節 英語教育学の不在

ところで英語教育というこんな重要な学問の根本的な闘争が、何十年も続いてきたにもかかわらず、それに答えるべき学者たちのほとんどすべてが当時も今も英文学や英語学の専門家で、英語を教えているながら英語教育に素人の、専門外の集団である。では、これほど世間では英語教育が問題になっておりながら、なぜ英語教育の専門家がないのか。ハンドルのない車が運転できないのと同様に、これを問うことなしに英語教育は前に進むことはできない。そこで現場の英語教師こそ、もっと論争に加わるべきである。ところが出る場がない。なぜか。

それはそこには英語教育を専門とする学者がいては困るからである。英語学・英文学以外は学問ではなく、「英語教育なら誰でもやっていることだから、それは学問とはいえない」というのがその理由である。世間が本当に必要とする英語教育学の誕生を求めたとし

ても、英文法や英文学者集団から離れて英語教育の本質をまじめに語ろうとする英語教育者は、新聞、雑誌をはじめ世間の英語教育批判者と同様、場合によっては彼らの“ムホン人”ということになる。そして集団の中に安住する彼らは実に巧妙な思惑を持って、「英語教育」を自らの学問の世界から遠ざける一方で、眼前にある日本全国の学校制度全体に係わる英語教育を隠れ蓑として、自分たちが活躍するための重要な「英語産業の市場」と見做し、実際には自分たちが学問とみなす「英文学・英文法」をその市場に組み込み、次章で述べるような方策のもとにその地位を勝ち取ったのである。

第5章 英文学者の台頭

第1節 「教養」から「英文学」へ

藤村の論文(1927年)から9年後の1936年、福原麟太郎代筆(岡倉由三郎)の論文『英語教育の目的と価値』研究社(川澄p397)が世に出る。この40ページにもわたる論文の内容は、大雑把に言えば、英語は外国文化を輸入したり、日本国家を発展させるのに必要な教科だから、それを教育することは「国家の問題」だという。外国文化の中でも学ぶべきは西洋文化であり、その代表が英国文化であるから英語学習の目的は当然英国文化を学ぶことになるが、それは単に学ぶだけでなく、「精神陶冶」を通じて英国文化を“批判”しながら日本文化を磨くことがその目的であるという。

こうしてそのほとんどが岡倉の目指してきた道具としての英語教育とは無関係の、英文学の高貴さと英文法の権威を長々と連ねた論文となっている。そしてあげくは、英語教育の趣旨を「教養価値」とし、驚くことに「受験英語については実用の英語であり役に立つから大いにやってよしい。そのために教養の方面がおろそかになるのは致し方ない」と言う。このように代筆を許された論文とは言いながら、実際の内容は岡倉の当時までの英語教育に関する論文や書簡を見る限り、ここにはほとんど福原の考えが織り込まれたものだと思われる。次節以降でそれを検証する。

第2節 岡倉との矛盾点

この福原論文を通して、岡倉の英語教育に対する一貫してきた考え方がどのように歪められたか。その矛盾点を次のように羅列することは、今後の英語教育を語るに当たって重要であると考えられる。

- ① 英語教育では「実用価値よりも教養価値が首位に置かれなくてはならない。(p410)」というが、これが役に立つ英語教育のために、終始一貫して英語の実用価値を重んじてきた岡倉のことばとは到底解せない。

- ② 文法ルールについて「Itという三人称単数の動詞の後には三人称単数の動詞 is が来るということはやがて秩序法則の観念を与えるといった事 (p424)」になり、「その事実の裏では、秩序法則の精神を生徒の頭に叩き込むことができるであろう。(p410)」という。が、これは全く逆で、岡倉はこうした文法的な日・英語の違いを“無意識に”習得させるためにこそ、オーラル・メソッドによって訓練することに労力を注いできた。ましてや“三単現にsがつく”というような文法ルールが英国文化の教養や批判の対象として値するどころか、人の従順さを磨くための道徳的倫理的訓練となるというのでは、これは岡倉の理想とする英語教育に対する単なる無知であるのか、それとも挑戦であるのか、もはや絶句するしかない。
- ③ さらに初年級のオーラル・メソッドは「ただ口舌の教師によって教えられることは危険 (p426)」だといひ、「後ろに英国文化の解釈力を豊富に抱懐し、この生徒たちに日本文化のための西洋を知らせ、無暗な西洋を鵜呑みにさせまいとする熱意に燃えた教師にして初めて、そのオーラル・メソッドを生かすことができる (p427)」という。西洋文化の批判という実例が見られるのはここだけである。それも福原には、パーマーとそのオーラル・メソッドがいかにも“無暗な西洋を鵜呑みにさせる暗鬼”と映ったのであろうか。そして福原はこの観点からH.Eパーマーを「軽薄で、小心者で、優れた学者ではなかった」と結論づける。
- ④ オーラル・メソッドは「一種の道徳的倫理的訓練であるが、教室においては注意している必要がある (p424)」という。これについては、当時J.A.コメニウスの科学的言語教授法をたしなんでいたはずの岡倉が、このメソッドをわざわざ道徳学や倫理学のような哲学的な営みに摩り替える道理がない。
- ⑤ 「受験英語は実用の英語である。これは貨幣のようなものであるから、十円持ってゆかなければ学校へ入れないといえ、仕方がない…とにかく役に立つのだから、大いにやってよろしい (p427)」と放言する。ところが岡倉は当時の文法的な細かい点ばかりを突く受験問題を決して由としなかった。福原はさらに受験英語を「教養として教えなければ、将来に害をのこす (p427)」と予言しているが、その予言は図らずも漠然と英国紳士の「教養」として教えてきたために、現代の若者にまで恐るべき災害となってつきまとい、21世紀の受験英語産業は予想通りますます繁盛している。
- ⑥ さらにこの論文には不可思議な「批判」「批評」という用語が25回も出てくる。このことばは、いままで英語学・英文学者たちがあまりにも英語教科の必修を強引に押し進めてきたため、“日本は英国の隷属国ではない”という世間の強い批判をうまく避けるために考え出された対抗馬としての用語であろう。しかし以下のような論調からすると、逆に日本が正真正銘の英国の植民地化という観が拭えなくなる。たとえば

英国文化に「批判を与えるのが外国語教育である(p416)」から、それゆえ、

- ⑦ 「英語教育は英国文化への反省をうながす外国文化の入門である。したがって又、外国文化批評の稽古である。かわいい子に旅をさせることである。(p417)」さらに「英語教育はその外国語(=英語)文化への入門である為に存在する(p419)」といい、「この観点に立たない以上英語教育は不要(p419)」だとさえ断言する。これこそが大学や大学院の英文科で習得する「英文学研究」の根底であり目標であるから、これはむしろ英文学の教師として旅立とうとする弟子たちに向かって発すべきことばであって、これを小・中・高・大の英語教育全体に直接結び付けるのは異様としかいえない。英文学者というより言語学者であつたらう岡倉が、日本の若い国民によもや英文学批評の訓練をさせることまで考えていたとは信じがたい。
- ⑧ 語順について「英語が英国文化の代表者、従って、外国文化の代表者(p417)」であり、「どんな英語の破片にも英国文化は入っている(p419)」という前提で、その英国文化を代表しているのは語順であり、畏れ多くも「特殊な観念配列法に従っている」という。これは岡倉と一脈通じるところがあるようだが、語順といえども時代を追って変化する。英文学者ならいざ知らず、「英語の元といわれるインド・ヨーロッパ祖語も、日本と同じSOVだったため、古英語も当時は比較的^{自由}語順であった」(末延2013)ことを、岡倉が知っていたとすれば、語順の違いをことさらにありがたがることはなかつたらう。
- ⑨ さて、福原はこうして国民がすべからく英語を学んで英国文化、英文学を批判せよと主張するわけだが、これほど多くの「批判」という文字が現れるわりには、英国文化の批判精神の実例はどこにも見られない。それどころか、英語は英国文化の代表者などと、そっくりそのままの憧憬と礼賛、模倣に終始する。それより第一に模範とする英国に対して、日本の若者をはじめ国民がこぞってその文化を、たとえばシェクスピアの作品をいちいち批判できる能力が完成したうえで実際に英国国民にたいして批判するということ自体、いかにも夢物語でありおこがましいことではないか。25回という異常なほどの「批判」の頻度は、実はそうした矛盾の隠れ蓑であつたのだ。そして以上は単に過去に起こった論争として終わっているのではなく、21世紀の現在にも継続していることを私たちは銘記すべきである。

第3節 苦渋の弁明

そしてここにはさらに、現在と比べて当時の学問的発達^の未熟さということをも十分に考慮したとしても、英語を何としてでも今までどおりの必修科目に留まらせるための苦し紛れの説明、それに言語学的にも明らかな見当違いが羅列されている。

- ⑩ 「親族結婚ばかりしては、種は改良できない。異種結婚を行って新しい精神的肉体的要素を導入してゆくこと (p413)」
- ⑪ 語の文章の特徴として「文語で謹んで書く場合には、『おのれ』ということを表に出して主張しない」というが、日本語こそ世界でもまれな無主語の言語といわれる。
- ⑫ 「外国文化を消化融合してはじめて一国の文化は進展する (p419)」とは言い切れない。なぜなら日本は鎖国時代にこそ大いに独自の文化を發展させたではないか。
- ⑬ 「どんな英語の破片にも英国文化は入っている」というが、英語の大量の単語の語源はフランス語である。
- ⑭ 「英語教育は実にこれ (物質文明の輸入) を避けて、教養価値を重んじ、文化批判を教えようとするものである (p423)」というが、そんな批判を日本の若者に強制するほうが、物質文明の輸入よりはるかに害が大きいという現実を理解していない。さらに文面の、西洋文明の輸入に際して害となるという“南京虫”は何を象徴しているか。当時も今も受験英語の微細な発音や単語、特殊な“イディオム”や複雑な文法の用法で苦しめられている日本の若者たちのことを考えるとき、実に関心ある問題である。

第4節 日本文化を踏み越えて

さらに、

- ⑮ 「外国語の為に国語にはますます強く意識され、豊富に発達せしめられる。…日本語の発音並びに語法について敏感なのは、国語の教師でなくて英語の教師であるということは、各種の学校に於いて見られる現象である (p428)」という。これはかつて1905年の帝国教育会での講演で、岡倉が“英語の授業は文法の説明ばかりで、まるで日本語の授業だ”と批判していたことを暴露したものであり、これは逆に英語の教師と授業数の異常な多さをいみじくも示している。たいていの大学では今日でも「国語学」の教員は、「英語・英文学」の10人に対して1人である。
- ⑯ 国語の標準化について「一般にことばは自然に自ら標準化してゆくものだから、時期を待てば意味が落ち着いてくるものであるが、…これを正しく標準化することに力を与えるものは言語意識を明敏にする外国語教育だ。(pp428-9)」という。しかしことばが自然に標準化するというより、むしろ方言や国際英語の発達には標準化というより多様化の方向に向かっており、それは個性でもある。標準化にはむしろ別にエネルギーが必要なのである。
- ⑰ 翻訳依存について「国民自身が外国文化について批判力を持っていなければ、せっかくの文化施設(ここでは翻訳局のこと)が有害となる場合も起こるのである。これにはやはり国民自身を教育しておかなければ駄目である。そしてそれは翻訳ではいけな

い。直接外国文化に接してその実相に当たらせておくことが必要である (pp429-30)」
といいながら、「国家はそういう翻訳の達人を沢山養成することが必要であるとともに、
又英語教師も沢山こしらえて…(p430)」という自己矛盾に落ち込んでいる。また、
英語の繊細で微妙な表現は翻訳では伝わらないというのでは、その文学性は原書に匹
敵するどころか、それにも勝るといわれる上田敏の名訳をはじめ多くの言語の血のに
じむような努力の結晶は意味がないということだろうか。

第5節 北方民族の模倣

- ⑱ 「わが国の明治文化が英国文化に負うところの多いこと (p431)」は、たとえば式日
にフロックコートを着る習慣は、本場の英国では廃れてしまったのだが、日本では残
存していること、またヨーロッパの国々では人は皆右側通行なのに、日本は英国と同
じ左側通行を守っているという。
- ⑲ 英語の構造は「他の主要なヨーロッパ言語に比べて著しく簡易であるという特長
(p431)」があるというのだが、世界ではこれほど多くの例外をもつ言語はないとも
いわれてきた。
- ⑳ 「文化は決して民族の特性とはなれて存在するものではない (p431)」と、ここでは
じめて森鷗外や菊池寛の主張を取り入れている。それなら一方、日本文化の中に生ま
れた日本語とそれを使う日本人の学習者たちはどうか。正則英語という名のもとに、
生徒に対して「ニホン英語」を禁止して、英国文化で育まれた英語の発音と文法、そ
れにイディオムの完全な暗記に従わせることが、いかに非情で無謀なことかが自然と
反省できるはずだ。また、たとえ英語学習の一部とはいえ、日本の若者に、まるで大
英帝国に忠誠を誓わせるかのように、遠くはバイキングの子孫として、そして中世の
“to throw down the gauntlet” (戦いを挑む) のような、あるいは世界中へ植民地獲得
のための戦いの風習のような大量のイディオムを、一切“批判”することなく、そっ
くりそのまま模倣、暗記させて、むだな時間を費やさせ生徒を苦しめる行為は、当時
の事情を考慮したとしても、むしろ日本文化を踏みにじるに等しいと知るべきだ。
- ㉑ 「北方民族が鈍重で野暮で実際的で勤勉で忍耐力に富み、粘着性を持ち、意思的で
内向的であるに反し、南方民族は軽快で優雅で怠惰で飽き易く変わりやすく感情的で
表情的であることは、種々の事跡に徹しても分かることであるが、日本人はどちらか
というと後者に近い性情を持っているのである。こういう性情を持っている国民は、
なるべく反対の、すなわち北方民族の文化に多く接してそれから刺激を受けるがいい。
英国民はその北方タイプのおよき典型である (pp431-2)」と何の“批判”もなく断言す
る。「鈍重」とは不気味な人たち、「野暮」とは野蛮人のことであろう。

② そしてこの長い論文の最後では、“狭い島国に育った引っ込み思案の国民は、世界に向けて奮闘努力を”という尋常小学校の国語読本檄を引用して「このような短所を矯正するには、英国文化に接するのが一番いいと思う (p432)」と結んでいる。文脈からゆけば、日本民族は英国国民の祖先であるあの北方のバイキング民族の生き方に続け、と暗に示している。それを暗示するかのように、この論文の発刊される前後の日本軍は、まるで北方民族に続けとばかりに日清・日露戦争を経験し、やがてそれは国民に世界征服をあおり、若者たちを世界大戦へと突入させてゆく。この点でこの論文は歴史に残るおぞましくも大胆な予言であり、しかも北方民族に奪われた魂がここに実現しているのだ。

以上これまで見てきたように、英国および英国文化の「批判」を含め、これだけのために日本の若者が必修科目として学ぶのは、あまりにも無意味であることを、結局は披露してしまった論文だと筆者は結論付ける。これだけを見ても、当時の彼らの英語教育がいかに非人間的かつ非学問的であり、いかに教育学に素人の論であるかがわかる。その中身は、すでに英文学が本場英国で最も栄えた、もはや数百年も前の名残を大事に掲げながら、学生たちの若き新鮮な魂を吸いとりながら生き延びようとする英文学・英文法学者たちの生き様をあらわにした。ここには悲しいかな岡倉が今まで示してきたような、言語教育に対する教育心理学的でユニークな思想は見当たらないし、言語に対する洞察も微塵も見られない。

こうした点を考慮すると、福原は当時の英文学者の先頭に立つ身として、岡倉の名のもとに国民や若者を英文学に誘うために書いた、ある意味で英学史に残る論文だと読むことができる。それどころかさらに判断が許されるならば、この論文は国民から見れば、国民の幸福のための英語教育が、今までどうしてこのようなごく一部の人のための、“英文学の研究”という限られた目的のためだけになされてきたのかと、読み返すほどに考えさせられるのである。

第6節 オーラル・メソッドと英文学者

さらに福原は『著作集9(昭和44年7月)』に書かれているように、すでに「代筆」論文より11年も以前、1922年文部省の招聘により英国から来日した英語教育学者のH.E.パーマーに対し、一貫して異常なほどに教授法に対抗意識 (p122) を抱いていたことが確認されている。そこではパーマーのことを「わたしはこの男がどうも嫌いで、…どうしてかという、来朝の最初に、彼が帝大で講演をするのを聞いたとき、実に軽薄なやつだと感じたのが動機である。パーマーを通じて自分の心を豊かにするものを何も感得できなかった」、とか文学系と語学系の教授間の争いに彼を引き入れて弄び、挙句は「小学

者…パーマーは優れた学者ではなかったに過ぎない。優れた学者なら何かしら心を豊かにしてくれる」と書いている。

いうまでもなくH.E.パーマーの業績は、英文学や英語学者たちの間ではいざ知らず、当時から英語教育の分野では世界的に偉大であった。なかでもオーラル・メソッド (oral method 口頭教授法) は、本来岡倉が強く推してきたところで、教育心理学的には学習者に“文法を意識させないで学習させる”という、遠くは1868年J.A.コメニウスの『言語教授法』、そして1904年にノーベル賞を受賞したロシアの生理学者の「条件反射」の原理に基づく150年もの歴史を持つ画期的な言語教授法である。それを何の科学的な根拠もなく、「学習の過程で考えさせない」つまり“文法的思考が伴わない”という軽薄かつオーラルメソッドとしては致命的な理由から福原はこれを無視した。

それに代わる教案として福原は「覚え書 (p271)」の中に、小学5,6年生を相手にオーラル・メソッドに対抗する独自の教案を書いている。そこには、「主語」という文法用語を使う代わりに「はが格」、「述語」の代わりに「ある格」、「所有格」の代わりに「の格」と生徒に教え、こうして文法的なことばの使用を最小限にとどめるという策を講じながら、文法順序をたてて意識させ、英語の一字一句が大英帝国の文化を根底にした言語であることをしっかりと考えさせて、ことばの並べ方を生徒に覚えさせたという。

つまり福原は“三単現にsがつく”ことをいちいち使う度毎に自覚させるやり方で、“駅の階段を走って上がるにも、一段一段の数や幅や高さをかみ締めて考えながら上がれ”という英語の順序の原理を教えたということになる。ところが一方、中学の授業教案には、パーマーのオーラル・メソッドを採用したという。これでは順序が逆であるが、さらに「わたくしとしては教わるまでもなく、こちら(つまり岡倉のことであろう)でも試みているのだという心得がありました…」と、恩師岡倉由三郎の名を借りた言い訳が続く。

日本文化特有のこうした陰湿なしがらみの中で、英語学習に苦悩する日本の若者たちを救うために、英語教育を学問の領域まで引き上げようと努力してきたまじめな教師や学者たちのために、その後新しい教授法を抱えて次々と来日した真の英語教育者たちも、こうして消されていったのだ。さらに本当の厄介な問題は、弟子によって書かれたその「編集後記」にあった。

そこには「福原先生の英語教育論は一見するとパーマーに批判的で、またオーラル・メソッドなどに疑問をお持ちになっているようである。だが先生の場合には、オーラル・メソッドや実際の英語の訓練は当然心得ているべき基礎なのである。…先生の場合には英語の教育は、あくまで高く、英語教育が、すなわち高い教養なのである。そのためには当然、英語を聞くことも話すことも書くことも、また読むことも、含まれている」という。しかしこの編集後記の内容が事実であったとすれば大問題だ。オーラル・メソッドが初歩の学

習者のための大切な基礎であることが判っていながら、彼らが大きな権力を持って学習者を完全に無視し、パーマーとこの偉大な教授法を封印していたことになる。その責任は本人はもとより、こうした深いしがらみの中にある福原の弟子たちにこそ向けられるべきだ。

そもそも福原の恩師である岡倉由三郎が、いみじくも1905年に指摘し夢見たであろう Pattern PracticeやContrastの概念を基礎にしたこのオーラル・メソッド教授法は、約30年を経てH.Eパーマー、続いてC.C.フリーズが来日し、日本にoral approach (口頭接近法) を導入しようとするが、それは運命のいたずらであろう、福原の弟子たちによって無残にも再び葬られる。

さらにあの代筆論文の大方の内容が、福原によって独自に書かれたという証拠がある。それは福原自身が書いている著作集9にある。そこには恩師岡倉の業績について語る中に、その代筆論文の成り立ちが記されている。それは

「また昭和11年に研究者英語教育叢書中で、『英語教育の目的と価値』を出しているが、福原が代表したものであるから(同じく)、氏の業績として、大切ではない(p116)」

という記述である。“恩師の代筆の文が業績として大切ではない”と断定するからには、恩師ではなく弟子の福原が思うがままに書いたからに他ならない。さらに、昭和7年に岡倉が書いたとされる岩波講座『教育科学』の中の「英語教育」には、このとき恩師はすでに、「英語教師についての昔日の意気と抱負を失っており、パーマーの影響が一般に行き亘った後であるうえ、寺西武夫に代筆せしめたものであるから、業績として重視するに当たらない」

とあり、すでに昭和7年の段階から病床に臥していた岡倉は、弟子に丸投げしていたことがわかる。こうして岡倉とパーマーという二大英語教育者の時代は去り、英学の世は今後、英語教育の何かを知らずして巨大な英語教育市場を支配する、英文学者一色の時代となる。

そしてついに1937年(昭和12年)、英国文化模倣の完成を目指した英語・英文学者たちの眼前で、日本国軍も北方民族の「刺激」を受けたのか、“threw down the gauntlet”し、北方民族のバイキングよろしく中国との全面戦争に突入、南京を占領する。こうして世界最大の植民地を支配する大英帝国の、植民地政策の模倣にじわじわと近づきながら、第二次世界大戦を目前にすることになる。

第6章 結語

本稿では英学史のあけぼのから第二次世界大戦前夜までの、英語教育の動向について述べた。そこでは英語を、独立国である日本がどのようにとらえ、駆使してきたかを見た。

それは一口にいうなら英文法・英文学者たちによる英国礼賛、“偏英”の押し付けであり、その中身といえば英語教育とは程遠く、彼ら学者たちの英文法と英文学を強要するものだった。しかしその足元には、日本人が独立国として偏見なく、自然に使うに値する日本人本来の「ニホン英語」に向けての、ほんの一点ほどの光がちらほらと見えてきた。

歴史を顧みれば1200年も前、遣唐使空海らは中国から持ち帰った漢字を、同僚や弟子とともにやさしく造りかえ、独自のカタカナやひらかなを考案したといわれる。これは当時まだ文字を持たない民衆のために、持ち帰った難解な漢字を、簡単で便利なデザインに作り変えて提供することが目的であった。

そして200年ほど前、前野良沢や杉田玄白が蘭学を始めたとき、オランダ語とその文化を学んで単に教養を身につけるような悠長なことが目的ではなく、オランダ医学を知り、目の病に苦しむ人々を人を助けるためであった。同様に日本が生きがためという命がけの国防、国際貿易、日本の世界的向上のためであり、さらには日本を欧米と同じ水準にまで引きあげるといった国益を目指すものであった。それは単に顕微鏡で英語の発音や文法やイディオムを探ったり、ましてや英国というただ一国の文学のほんの断片を賞味しただけで“批評”するなどというような大それた、かつ贅沢な学問としての英語では決してなかった。

ところが明治時代に入ると英語教育の前途は、残念なことに若者の精神衛生を憂う国民の不安もむなしく、正則英文法や英国文化礼賛の時代ブームに便乗した、教育学にはまったくの素人の英文法学者や、英文学者たちに委ねざるを得なかった。しかし英語教育はその間、振り子の両極端で揺れる中で、日本人に相応しい英語教育を目指してきたであろう岡倉由三郎をはじめ、森鷗外や矢田部、菊池寛、それに一見素朴に見えながら、若者の精神発達を憂慮する多くの国民の意見がその中心にあって揺るがず、いわば芯の役目をしていたと考えられる。

こうして岡倉の理想の英語教育実現の夢もむなしく、英語教育の目標が英学初期の国民の命や幸福に密着した目的から、「英国文化の吸収」、「教養のため」へ、そして国民の生活や願いから程遠い、単なる「英文学のため」へとすり替えられてゆく様子が明らかとなった。このようなしがらみの中で日本の英語教育は、英語・英文学の存在を確実に確保するための恰好の隠れ蓑として国民はおろか学習者と密着した本来の目的性も方向性をも省みられないまま、日本の英学の内のほんの小さな分野である英語・英文学の一部へと吸収されて行く。

J.A.コメニウスはいう。「各人はただ単にその本性に適合した方向に向かって容易に導かれるばかりではなく、また或程度自発的にその方向に向かって急ぐものであり、若し何かの障害がその前途に横たわっている時には、苦痛を感ずるものである(『大教授学』

第12章10節稲富p115)」と。学習者たちがたとえ自ら学びたいと渴望していても、錯綜するしがらみを前に、この21世紀を迎えた今も、英語学習は苦痛の連続である。こうして自らのハンドルを持ってないできた日本の英語教育は、敗戦後も“イギリス偏向”の「英文学」を土台にしながら、何のためらいもなく、戦争勝利国“アメリカ偏向”へと飛び移ることになる。

参考文献

- 福原麟太郎『英語教育論』研究社 1948
福原麟太郎『福原麟太郎著作集9 英語教育論』研究社 1971
福澤諭吉 齊藤孝訳『学問のすすめ』ちくま新書 2010
川澄哲夫『資料英学史2』大修館書店 1978
久米邦武『米欧回覧実記』岩波文庫 1977
コメニウス, J.A.『大教授学』稲富栄次郎訳 玉川大学出版部 昭和44年
齊藤秀三郎『熟語本位英和中辞典』岩波書店 1952
櫻井役『日本英語教育史稿』敝文館 1936
末延岑生「Pattern Practice の類型化研究」*Language Laboratory* No. 8. The Language Laboratory Association 1968
——「ニホン英語」本名信行『アジアの英語』くろしお出版 1991
——「英語教育の今日的諸問題」『現代英語教育』研究社 1992
——『ことばの元を探る—知恵と文字の仕込み』神戸商科大学研究叢書LXXI, 神戸商科大学学術研究会 232pp. 2004. 3.
——『ニホン英語は世界で通じる』平凡社新書 2010
——「ニホン英語 (*Open Japanese*) をデザインする」『芸術工学2011』神戸芸術工科大学 2011
——「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 形態編—アジア英語 (*Open Asian*) を礎として」『芸術工学2012』神戸芸術工科大学2012
——「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 統語編 (語順)」『人文論集』第48巻 兵庫県立大学 2013a
——「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 統語編 (時制) 日本「アジア英語」学会 2013b
——「ニホン英語 (*Open Japanese*) の類型化研究 音声編」『人文論集』第49巻 兵庫県立大学 2014

Suenobu, Mineo *et.al* Listening Comprehension and the Process of Information Acquisition by Non-Native Speakers of English, *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, XXIV/ 3, Julius Groos Verlag, Heidelberg. West Germany 1986. 8

Suenobu, Mineo *From Error To Intelligibility*, Shubun International, Tokyo.199 pp. 1988. 8.

———*Communicability within Errors*, KUC Monograph LII, The Institute of Economic Research, Kobe University of Commerce, Kobe. 254 pp. 1995. 12.

———*Errorology in English*. Yugetsu Shobo, 740 pp.(bind copy), 2002.11.

———*Pathology of English Teaching in Japan*, KUC Monograph LXVIII, The Institute of Economic Research, Kobe University of Commerce, 226pp. 2003. 3.

———*The Preparation Theory of the Origin in of Language*, UH Monograph LXXVI, The Institute of Economic Research, University of Hyogo, Kobe, 230pp. 2006. 3.

末延岑生他「日本人の英語」『人文論集』31-1 神戸商科大学 1995

高梨健吉・大村喜吉『日本の英語教育史』大修館書店 1978

梅根悟『コメニウス』牧書店 1963